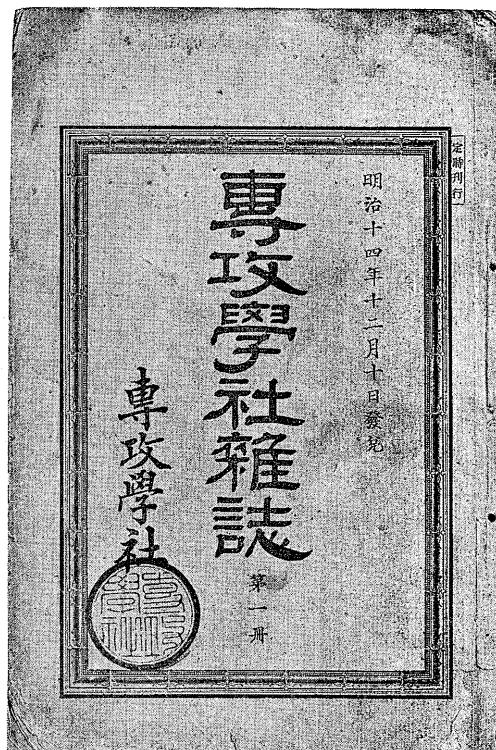


『專攻學社雜誌』所載ノ伊藤圭介先生ノ「櫻花說」

○『專攻學社雜誌』所載ノ伊藤圭介先生ノ「櫻花說」

牧野富太郎



明治十四年十二月十日ニ『專攻學社雜誌』第一冊ガ東京デ發刊セラレタ此雜誌ハ明治十一年十月二十日ニ井上哲次郎（文學士）、元田肇（法學士）、富士谷孝雄（理學士）、渡邊讓（理學士）ノ四氏ガ創立シタ專攻學社デ發行シタモノデ世ニ出タノハ唯此一號一冊ノミデ其レガ始メノ終リデアッタト記憶スル、社員ニハ右四氏ノ外ニ岩佐巖（岩佐巖）、石川千代松、穗積陳重（アトリスター）、穗積八束、外山正一、千頭清臣（アトリスター）、植田範爲馳（植田範爲馳）、植田豐（植田豊）、村岡範爲馳（村岡範爲馳）、橋、倉田吉嗣（理學士）、隈本有尚、山川健次郎（ヒロソル、オフ）、矢田部良吉（ボクサイル）、松井直吉（ドクトル、オフ）、小藤文次郎（理學士）、寺尾壽（理學士）、有賀長雄、佐々木忠次郎（理學士）、菊地大麓（マスター、オフ）、宮崎道三郎（法學士）、白石直治（理學士）、平岡盛三郎ノ諸氏ガ居ラレ外ニ客員トシテエドワルド、エス、モールス（ドクトル、オフ）、ト



伊藤圭介先生  
『錦五十裏讀』  
伊藤圭介  
植物會誌  
博士學理

櫻花說  
伊藤圭介  
稿  
夫櫻花我大日本一大名木ニシテ、我邦ニテハ之ヲ花  
ト希望シテ居ル  
今茲ニ右伊藤圭介先生ノ「櫻花說」ヲ轉載スル主意ハ  
コンナアマリ人ノ知ラヌ雑誌ニ登載セラレテアルノデ  
今此ニ再録スルノハ新ニ世人ノ参考ニ之レヲ供シタイ  
爲メデアル、私ノ此『植物研究雑誌』ハ時々此様ニ埋  
没シテ居ル記事論說ヲ再録シテ聊カ斯學界ニ貢獻シタ  
通リ、雑誌ノ大サハ菊版デアル

伊藤圭介トノ兩氏、又世話人トシテ池田謙齋、加藤弘之、大鳥圭介ノ三氏ガ關係セラレテ居ツタ、ソシテ右雑誌第一冊ニハ卷頭ニ其雑誌編者ノ識セル「專攻學社雑誌引」ガアリ、次ニ本文欄ニハ加藤弘之氏ノ「日本初世開化之源因(第一)」、寺尾壽氏ノ「平均線ノ論」、有賀長雄氏ノ「倫理化醇說ノ批評」、伊藤圭介氏ノ「櫻花說」、井上哲次郎氏ノ「アリストーツルノ傳」ガアリ、次ニ「雜報」欄ガアツテ石川千代松、田中館愛橋、佐々木忠次郎、隈本有尙ノ四氏カラ提出セラレタ雜錄ガ列記シテアリ、次ニ井上哲次郎氏ノ「專攻學社記」(漢文、次ニ明治十二年一月ニ議定セル「專攻學社則」、次ニ「明治十四年十二月調專攻學社社員姓名」ガアツテ了ツテ居ル、此一冊ノ定價ハ貳拾五錢デ署名セル「編輯人」ハ元田肇氏、「印刷人」ハ竹中邦香、「發兌本局」ハ東京神田區淡路町二丁目四番地ノ國文社デ、府下ノ賣捌所ガ新橋竹川町國文社第一支塵、日本橋通三丁目丸屋善七ヲ始メトシテ十九軒、地方ノ賣捌所ガ京都ノ駿河堂ナド同ジク十九軒デアル、其表紙ハ多少紫色ヲ帶ビタ淡藍色ノ洋紙ヲ用キ其表題文字ハ寫眞ガ示ス

『專攻學社雑誌』所載ノ伊藤圭介先生ノ「櫻花說」

『專攻學社雜誌』所載ノ伊藤圭介先生ノ「櫻花說」

王ト稱ス、支邦ノ牡丹ノ一灌木ヲ贊シテ、花王ト誇稱スルトハ雲泥ナリ、故ニ本邦ニテ單ニ花ト云ヘバ、櫻ナリ、鈴屋翁ノ歌ニ、朝日ニ匂フ山櫻花ト咏ジタルモ、是此花ノ研艶、怜モ旭日ニ相映ジ、融々トシテ殆ンド名狀スベカラザルノ美觀ヲ、賞揚シタルモノニシテ、是豈櫻花ノ爲メニ第一ノ知己ト云ハザルベケンヤ、

斯ノ如キ衆芳ニ冠シタル、實ニ我邦ノ名花タルヲ以テ、今此花ニ係リタル談柄ヲ掲ゲテ、初學博物參考ノ一助ニ供ントス、是亦無益ノ贅言ニ非ズト自ラ信ズレバナリ、

先ツコノ名實ヲ訂正セん、櫻ノ一字ハ即チ櫻桃ナリ、別物タルニハ非ズ、其果實ハ和產ニ比スレバ、酷ダ大ニシテ食用トシ賞スベキモノニシテ、此果ノ形稍桃ニ似タルヲ以テ、櫻桃ノ一名アルナリ、先輩ノ說ニ往々櫻桃ヲ以テ「ユスマムメ」ニ充ルハ訛ナリ、然ルニ小野蘭山翁ノ畫筵小牘ニ、櫻花是大木老者不啻數抱、其賞在「花而其種不止數十品」、櫻桃是小樹不數尺便結實、老者不踰丈、其賞在「實而其種不過數品」、名同而物別不可不辨矣、ト云ヘリ、然レドモ櫻ト櫻桃ハ和漢一類別種ナルヤ、ソノユスマムト酷ダ殊ナルガ如キニ非ズ、故ニ此翁ノ多識ト雖、亦是ヲ一失ト謂ハザルベカラズ、

斯ノ如ク漢產ノ者ハ、和產トハ同類異種ナレバ、支那ノ僧道本ノ詩ニ、東來始見「此花奇」、又獨立ノ海國櫻ト云フ、其佗清客心越、陳元贊等ノ數人、往往此土ノ櫻ヲ愛玩スルノ詩多シ、皆我邦ノ花ヲ創見シ、極メテ之ヲ欣賞セル狀ヲ觀ルベシ、又湖亭涉筆云、文恭（朱舜水ノ謚）酷ダ愛「櫻花」、庭植數千株、每「花開」賞之、謂「覺等」曰、使「中國有之當「冠百花」」、ト云シトゾ、往々清客ハ我國無「此花」ト云、又貝原翁ノ考ニモ、漢土ニハ櫻花無シト云フニ至ルナリ、又近歲清人黃遵憲ノ日本雜事詩ニ、朝曉看到夕陽斜、流水游龍鬪寶車、宴罷紅雲歌絳雪、東皇第一愛「櫻花」、ト其說ニ櫻花五大部洲所無、有深紅、有淺絳、亦有白者、一重至八重、爛漫極矣、種類櫻桃、花遠勝之、疑接以「他樹」、故色相亦變、三月花時、公卿百官、皆給暇賞花、今亦香車寶馬、士女徵逐、舉國若狂也、東人稱爲「花王」、墨江左右有數百樹「如雪如霞、如錦如茶、余一夕

月明再遊其地、眞如置身蓬萊中矣、ト云ヘリ此舉國若狂トハ、業平ノ世ノ中ニ絶テ櫻ノナカリセバ、春ノ心ハノドケカラマジトノ意ヲ、亦標シタルナリ、然レドモ彼土ニモ其花ヲ賞スベキ者全ク無ニ非ズ、蓋只其種ノ稀ニシテ、尋常之ヲ觀ルコト多カラザルト見エタリ、

兩浙輶軒錄ニ、櫻桃花ヲ咏ズル七古アリ、絲々春雨繁春烟、櫻桃盛放爭春妍、近日如何減顏色、雨驟更苦風來顛、中暑寄語花須緩々開、一花熒爛一銜盃、トアリズ、是櫻花ノ頃ハ風雨モ多ケレバ、一時ニ咲盡サユルト花ノ保シコトヲ述ベシ情ナリ、

其他古今櫻桃花ヲ咏ズル詩尠カラズ、清ノ鄒一桂ノ小山畫譜ニ載スル櫻桃ノ說ニ、唐時宴新進士於花下、謂櫻桃宴、トアリ、櫻桃モシユスラナラバ、矮小灌木ノ下ニ宴ヲ開ク可シヤ、又演鈞紀游ニ櫻桃樹極大、數圍數十丈、トアリ、埤雅ニ、櫻桃爲木多陰、ト皆喬木ノ狀ヲ云ヘリ、況ンヤ近歲舶賚ノ植物名實圖考ヲ閱スルニ、櫻桃ノ圖アリ、其狀全クサクラニシテ、花梗長クシテ一部ニ攢簇セリ、ユスラノ花小ニシテソノ梗無ク、一花ヅ、枝上ニ直接スルニ異ナリ、又唐畫ノ花鳥圖等ニ、櫻花ヲ寫スモノ間ニアリ、ソノ狀實ニサクラニ他ナラズ、亦彼土ニ此花アルヲ徵スルニ足レリ、質問本草ノ漂船ノ清人モ、皆サクラヲ櫻桃、鶯桃ト答フルモノ亦相符セリ、而ルニ先輩此樹ヲ以テ、或ハ海棠ニ屬シ、イトザクラヲ垂絲海棠トシ、眞ノ海棠ヲ南京海棠トスルノ說アリ、稻若水モ、イトザクラヲ垂絲海棠ト云ヘリ、然レドモ亦眞ノ海棠ニシテ、イトザクラニハ非ザルコト、固ヨリ論ヲ俟タザルナリ、

又佐藤氏愛日樓ノ文中、浪華蒹葭堂ノ櫻花譜ノ序ニ來舶ノ清客、此花ヲ激賞スルヲ論ジ、其爲彼之所無者割然一決無疑也、嘗怪世之以多識自標者、必欲得彼之名、或充以白櫻桃、云々而未嘗有一人爲明下辯之、以雪其冤者、何其名葩之不幸、ト此說斷然決定ノ如クナレドモ却テ惑說ナリ、

余嘗テ洋々社談中ニ、櫻花ノ說ヲ登載セリ、今之ヲ増訂シ、茲ニ稿ス、以下說亦冗長ナレバ、看官ノ催睡ヲ恐レ、姑ク筆ヲ閣ス、他日又續出スベシ

藤野寄命氏ノ「上野公園櫻花ノ種類」

伊藤圭介先生ノ説ハ此ニテ了ツテ居ル、此時分ニハ櫻桃ヲ我ガやまとくらナドト同一ノ品ト思ツテ居ツタガ今  
 日デハ全ク別ノ種即チ支那ノ實ざくらデアルコトガ判ツタ、此實ざくらハ學名ヲ *Prunus pseudo-Cerasus LINNE*。  
 (此學名ハ久シイ間内外ノ學者ニヨツテ我ガやまとくらノ名デアルト間違ヘラレテ居ツタガ理學博士小泉源一  
 君ハ始メテ之レガ支那ノ實ざくら即チ櫻桃ノ學名デアルコトヲ發見セラレタ)ト稱シ明治ノ初年頃ニ我邦ニ渡  
 ツタガ其後ニ歐洲種ノ實ざくらガ來テ羽前邊ノ東北地方デ大ニ結實スル様ニナリ初夏ノ候其實ガ普通ニ市場ニ  
 出ル様ニナツタ通常世人ハ此洋種ノ者ヲモ櫻桃ト呼ンデ居ルガ其レハ大ナル誤リデ唯支那產ノ者ノミガ櫻桃デ  
 ナケレバナラヌ櫻桃ハ漢名デ此種ハ支那ノ特產デアル春葉ニ先ツテ淡紅色(小泉君ハ白色ト記シテ居レドモサ  
 ウデハナイ)ノ花ガ咲キチヨツト我ガひがんざくらニ似テ居ル、洋種ノ者ハ洋種櫻桃トカ又ハ西洋櫻桃トカト  
 デモ呼ブベキモノデ斷然此支那產ノ眞ノ櫻桃ト區別シテ置カネバナラヌ我邦ノ園藝家ニ分類學者ナク根本的ニ  
 違フ此兩種ヲ漫然ト櫻桃ト唱ヘテ怪マズ爲メニ種類ノ混雜ヲ招クモ敢テ意トセヌノハ何タル不用意不見識ナコ  
 トデアラウ  
 又櫻桃ヲゆすらうめダナドト稱ヘシ時代ハ疾ウニモウ過去ニナツタ、若シ今日マダソンナ事ヲ言フ人ガアツタ  
 トスレバ其レハ五十年程モ前ノ古ル頭ノ持主デアル

## ○藤野寄命氏ノ「上野公園櫻花ノ種類」

牧野富太郎

本誌第三卷第一號ニ東京上野公園ノ櫻花ニ就テ藤野寄命君ノ記シタ櫻花ノ調査ガ明治三十三年一月發行ノ『日本園藝會雜誌』第九十二號ニ載セテアルコトガ見エテ居ルガソレハ同君ノ「上野公園櫻花ノ種類」ト題スル一  
 篇デ之レデ觀ルト當時同公園ノ櫻ノ有様ガ分リ且ツ今日右ノ『日本園藝會雜誌』ヲ繙閱セントスレバ之レヲ